

令和8年(2026年)4月21日

紺綬褒章伝達式を行います

令和6年(2024年)9月、当館は野洲市在住の鈴木仙太郎氏より下記のとおり資料の寄贈を受けました。このことに対し、同氏が紺綬褒章並びに賞杯を授与されましたので、下記の通り伝達式を行います。

記

1 受章者

鈴木 仙太郎(すずき せんたろう) 氏
昭和53年(1978年)1月7日生(満48歳) 滋賀県野洲市在住

2 褒章の内容および授与された日

紺綬褒章並びに賞杯
授与日：令和7年(2025年)10月25日

3 伝達式および取材対応の日時および場所

令和8年4月28日(火) 於 彦根市役所 4階 特別応接室(彦根市元町4-2)
出席者：鈴木仙太郎氏
田島一成市長、西嶋良年教育長、小島久喜教育部長
林善和彦根城博物館副館長

(1) 伝達式

午後3時～

(2) インタビュー等取材

午後3時20分頃～

4 褒章授与の理由

令和6年(2024年)9月、鈴木仙太郎氏から彦根城博物館へ湖東焼23件が寄贈されました。褒章は、この寄贈を表彰して授与されたものです。

(1) 寄贈資料の名称および数量：湖東焼 青磁牡丹陰刻文花生 1口 他22件(計23件)

(2) 寄贈日：令和6年(2024年)9月30日

* 概要は別紙のとおり

問い合わせ先

彦根市教育委員会事務局
彦根城博物館 学芸史料課
担当 奥田 晶子
電話：0749-22-6100
E-mail：okuda.a@mx.hikone.ed.jp

鈴木仙太郎氏寄贈資料

1 資料の名称および数量

湖東焼 青磁牡丹陰刻文花生 1口 他22件(令和6年9月30日受贈分)(計23件)

2 資料の概要

鈴木仙太郎氏が収集された湖東焼23件です。いずれも美術的価値および資料的価値の高い作品であり、質量ともに優れた貴重なコレクションです。

湖東焼は、江戸時代後期から明治時代に、彦根で制作されたやきものです。文政12年(1829)、彦根城下の商人絹屋半兵衛らが開窯し、後に彦根藩が召し上げて直営化し、井伊家12代直亮なおあきと13代直弼なおすけ、14代直憲なおのりのもとで制作されました。全国有数の高い技術に裏打ちされた湖東焼の優れた品質は、現在も高く評価されています。伊万里焼や瀬戸焼、九谷焼などに比べて現存作品が少なく、その希少性からも注目されるやきものです。

本コレクションは、希少な藩窯期の作と判断される湖東焼が多く含まれ、当該コレクション全体を見通すことで、湖東焼の歴史を一覧することができます。

3 主な資料の写真および解説

(1) 湖東焼 青磁牡丹陰刻文花生 1口

口径6.0cm 底径9.3cm 高29.0cm

江戸時代後期

当館蔵(鈴木仙太郎氏寄贈)

緑味の強い釉を厚く全面にかけた青磁せいじの花生。胴には、牡丹唐草文や幾何学文を浅く線刻しています。青磁は、全面を青緑色で彩った磁器で、中国では紀元前にはすでに作られていました。湖東焼でも中国の青磁を範とした制作が行われましたが、比較的小規模の制作であったのか、その現存作品は多くはありません。

本作は、青磁釉の発色が良好で、均整のとれた器形や堅く焼き締まった素地、精巧な絵付が出色の優品です。作風から、湖東焼が安定的に制作されるようになった藩窯後期の作と判断されます。



(2) 染付祥瑞写松竹梅文水指 1合

口径13.6cm 高16.6cm

江戸時代後期

当館蔵(鈴木仙太郎氏寄贈)

染付しよんずいうつしの祥瑞写の水指。祥瑞とは、明時代末期頃きつしやうに中国で制作された染付で、特に吉祥文様を多用する点が特徴です。祥瑞は呉須ごすの発色が良く、華やかな雰囲気をもつことから、日本では古くから、染付の中で最高のものでされてきました。本作は、祥瑞の意匠いさぎに倣い、胴の外側に松竹梅ふくろくじゆや福祿寿しやうきんの文字、龍、小禽などを描いています。青味がかかった白磁や鮮やかな呉須の色合いが美しい優品です。



湖東焼 青手九谷写菊蝶文皿 5枚

口径15.4cm 底径6.9cm 高2.8cm

江戸時代後期

当館蔵(鈴木仙太郎氏寄贈)

江戸時代に加賀(現在の石川県)あるいは伊万里(現在の佐賀県)で制作されたとされる九谷焼を写した作品です。

青と緑、黄を中心とする鮮やかな色釉で菊と蝶を描いた意匠や、見込

の周縁部に見られる緑地に点をちりばめる表現は、九谷焼の中でも、「青手」と分類される作品に特徴的な表現です。湖東焼は、伊万里、瀬戸、加賀など各地の窯から工人を招いて技術の向上に努めており、こうした名窯写しも作られました。



湖東焼 色絵花卉図夜学蓋置 自然齋絵付 1口

口径4.7cm 底径3.6cm 高4.7cm

江戸時代後期～明治時代初期

当館蔵(鈴木仙太郎氏寄贈)

蓋置は、茶釜の蓋などを乗せて用いる道具です。本作は、緑や薄紅、黄などの華やかな色釉を用い、軽やかな筆ぶりで花卉模様を描いています。

胴の銘から、本作は湖東焼の絵付師、自然齋(1821～77)の作とわかります。自然齋は、中山道鳥居本宿に住み、株仲間を結成して藩窯の素地を仕入れて制作を行い、細かな絵付の優品を残しています。

